

第1章 概 説

第1節 保存修理事業の概要

名 称	旧三笠ホテル 1 棟
現所在地	長野県北佐久郡軽井沢町大字軽井沢1339-342
現所有者	軽井沢町
用 途	ホテル（当初）、博物館（現在）
建 築 年	明治38年（1905）
建 築 主	山本直良
設 計 者	岡田時太郎
監 督 者	佐藤万平
施 工 者	小林代造（棟梁）、小林孝七（副棟梁）
指定区分	重要文化財（昭和55年 5 月31日付）
修理方針	半解体修理及び耐震補強
事業期間	令和元年 6 月 3 日～令和 7 年 9 月30日
総事業費	1,315,130,000円
事 業 者	軽井沢町
設計監理	公益財団法人文化財建造物保存技術協会
工事請負	清水建設株式会社東京支店長野営業所
概略年表	

和暦	西暦	出来事
明治37	1904	本館着工
明治38	1905	本館落成
明治39	1906	本館営業開始
		日本館落成
明治43	1910	豪雨による大水害で日本館他 1 棟流失
大正 3	1914	この頃別館営業開始
大正14	1925	明治屋（磯野長蔵）が買収し、株式会社三笠ホテルとなる
昭和19	1944	営業休止、外務省軽井沢出張所となる
昭和21	1946	米軍に接収、米陸軍第一騎兵師団の将兵休養所となる
昭和26	1951	米軍の失火により別館焼失 米陸軍八軍の将校レストホテルとなる
昭和27	1952	三笠ハウスとしてホテルの営業再開
昭和41	1966	磯野不動産株式会社へ商号変更
昭和45	1970	三笠ハウス廃業
昭和47	1972	株式会社日本長期信用銀行が買収
昭和49	1974	約50m北西へ曳家し移築保存
昭和55	1980	軽井沢町へ寄贈 重要文化財に指定

建物概要

建物は、木造二階建て、スレート葺、桁行42.3m、梁間16.4mで、敷地北西寄りに南面して建つ。平面は、東

西両翼を正面に突出させた凹型を基本とするが、西面に半八角形を突出させて左右対称を崩す。主玄関を東翼中央南に設けて、ロビーへの出入口とし、ロビー奥にリビングルームやライブラリーなどの共有空間を配す。正面中央にはバルコニー付きの車寄玄関を設け、その奥に踊場付き両返しの主階段を置く。1 階の西半及び2 階はすべて客室とし、西面の突出部は 1、2 階とも便所とする。

構造は、側廻りを組石造布基礎として土台を据え、通し柱、管柱、間柱を建て、胴差、梁桁、筋違で固める。

小屋組は、東西翼をクイーンポストトラス、棟高の低い中央棟をキングポストトラスとする。

屋根は、スレート葺の寄棟造で、西面突出部に八角形の塔屋を載せ、正面の中央と東西翼中央、背面の中央に飾り破風を設ける。

外壁は、軸部や胴蛇腹、窓額縁など木構造を強調したスティックスタイルを基調とし、壁板は下見板張り、軒は持送りで支持する。窓は、引違い又は上げ下げのガラス窓で、1 階にはアーチ形の欄間を付ける。扉は、正面玄関を引分けの腰付ガラス戸とするほかは開き戸とする。

内部は、床を板張りとし、その上にリノリウムを廊下と階段は筋敷、ロビーとライブラリーは中央敷、2 階客室は全面敷とする。壁は、漆喰塗で幅木と腰見切を巡らし、天井は、一部を除いて棧に皮付きの雑木半割丸太を用いた木組板張天井とする。

工事概要

竣工から115年が経過して進行した各部の劣化を補修するための保存修理工事を実施した。初めに素屋根など必要な仮設足場を設置して解体に着手した。解体範囲は、雨漏りがみられた屋根及び野地の全面と小屋組の約半分、堅樋からの漏水により破損した壁と軸部の一部とし、破損箇所を補修又は取替えて組立て直した。また、経年劣化した内外の塗装の全面塗替えと、漆喰壁の塗直し、建具や照明器具を取外して破損部を補修したほか、設備配線・配管の更新などを行った。耐震補強工事は、耐震性能を向上させるため、鉄骨フレーム補強や水平ブレース補強、煙突や基礎石の補強などを行い、これら耐震補強工事に支障となる内部の床や天井を解体し、補強後に復旧した。

このほか、正面 2 箇所の車寄や屋根の天然スレート葺、内装などの復原を行い、大正末期から昭和初期の姿に復原した。

第2節 軽井沢町の概要

2-1 位置と自然環境

軽井沢町は、長野県の東端、群馬県境に位置する。浅間山^(註1)の南東麓の緩斜面に広がる標高900～1,000mの高原地である。東京都心から直線距離125kmに立地し、避暑地・別荘地・観光地としても知られる。

町域は、東西12.5km、南北14km、面積156.03km²で、山林が面積の約55%を占める。起伏豊かな地形を形成し、東部から南部にかけては、鼻曲山、留夫山、一ノ字山、八風山等の1,000mを超える山々が連なり、西側はなだらかな傾斜で広大な佐久盆地へ続く。これらの山間には古くより関東平野へ抜ける急峻な碓氷峠、南には入山峠と和美峠があり、隣接する市町村を結ぶ。

植生は、森林や草原、湿原など変化に富んだ地形のもと、1,000種を超える維管束植物が自生している。自然林は、浅間山中腹から山腹などごく一部の地域でシラビソ林、カラマツ林、アカマツ林、ハルニレ林などが見られ、浅間山噴火の影響が少なかった碓氷峠では、ミズナラ、ブナといった落葉広葉樹林が残る。これらの一部の林を除くと、明治以降に植林したカラマツの人工林に至る所に広がり、かつて薪炭林として利用されたコナラ、クリなどの里山林が南部を中心に残る。

町内の河川は、湯川と濁川の2つの水系に属する。湯川は、白糸の滝付近の湧水に端を発し、千ヶ滝など広い地域を集水域として南下し、泥川、発地川、茂沢川と順次合流して、県下を貫流する千曲川へ達する。町域の8割以上が浅間火山の噴出物で覆われ、主な土壌は火山礫や火山灰と軽石層で構成され、水はけがよい。

年間平均気温9℃前後の冷涼な気候である一方、平均湿度は80%前後と多湿である。年間降水量は、1,000～1,500mmで夏季に多く冬季に少ない。6～9月を中心に霧が多く発生し^(註2)、この時期の日照時間は少ない。冬季には零下15℃前後となるが、降雪量は少なく、年最深積雪量は平均35cm程度である。

2-2 社会的環境

明治22年(1889)町村制の施行により、町村合併が実行され、軽井沢村、峠町、長倉村の一部(杓掛・塩沢)が合併して東長倉村が発足、発地村、追分村、長倉村の一部(借宿・油井・鳥井原)が合併して西長倉村が発足した。大正12年(1923)、避暑地としての発展による村の都市化と、軽井沢^(註3)という呼称が一般になったため、東長倉村が町制を施行し、軽井沢町と改称する。昭和17年(1942)県の指示もあって、軽井沢町と西長倉村

が合併した。さらに、昭和30年代には隣接する御代田町の一部の合併や編入を経て、現在に至る。

令和4年の国勢調査による軽井沢町の人口は、19,684人である。戦後からの人口推移は、昭和50年頃までは横ばい傾向で、それ以降平成までは上昇傾向が続き、令和以降も転入が転出を上回る。背景としては、首都圏を中心とした地域からの人口の流入、別荘地域における定住化の高まり、周辺市町村からの転入等がある。

令和2年の15歳以上の就業者数は8,427人で、産業別の割合は、第1次産業が3.5%、第2次産業が14.1%、第3次産業が81.4%となり、第3次産業の比率が著しく高い。これは、町内に宿泊業、飲食サービス業、卸売業、小売業といった観光関連事業所が多数存在するためである。観光客数は、平成15年以降800万人前後で推移し、平成30年をピークに約870万人、その後コロナ禍で一旦落ち込んだが、令和5年には約775万人と回復している。

交通網は、北陸新幹線がほぼ中央を横断し、並行在来線のしなの鉄道が、軽井沢と長野市篠ノ井間を結び、軽井沢駅のほか町内に2つの駅を有する。主要道路は、東西を国道18号、南北を国道146号が通過し、町外南部に上信越自動車道の碓氷軽井沢I.Cがある。

2-3 歴 史

有史以前の軽井沢は、古くは茂沢川上流から縄文前期の土器が出土している。茂沢南石堂遺跡では主に同代後期の遺物と竪穴式住居や石棺墓等が発掘されている。

南東部の群馬県境に位置する入山峠では、旅の道中の安全を祈願したとされる石製模造祭器(幣)が多く発見され、古代からこの地は交通の要所であった。

江戸時代になると中山道が整備され、難所と知られた碓氷峠^(註4)を越え、江戸から数えて18番目の宿場として軽井沢宿^(註5)が開かれた。軽井沢宿から南西へ向かうと杓掛宿に入り、さらに西へ進むと北国街道との分岐点となる追分宿に至る。これらは浅間根腰の三宿と呼ばれ、近世には宿場町として賑わいをみせた。

明治になると中山道を往来する旅人が年々減少し、住民の離村も伴って軽井沢は高寒冷地の一村として衰退の一途をたどった。さらに、明治17年(1884)碓氷新道(国道18号の旧道)の開通によって、中山道沿いの旧宿場町は決定的な打撃を受けた。

避暑地としての軽井沢は、明治18年(1885)カナダ生まれの英国聖公会宣教師アレキサンダー・クロフト・ショーとスコットランド生まれで工部大学講師であったジェームス・メイン・ディクソンの二人が旅行の途中に軽井沢を訪れたのが発端とされる。ショーは、故郷を偲ぶ

その美しい清澄な自然と気候に感嘆し、夏になると家族を連れて滞在し、明治21年（1888）には旧軽井沢の大塚山に別荘を建て、避暑地として好適であることを実践し、宣教師をはじめとした欧米人に紹介した。こうして軽井沢宿の周辺に外国人別荘が建てられていった（註6）。

明治26年（1893）の信越本線横川～軽井沢間の開通により、避暑地としての発展が加速した。同年には軽井沢における日本人初の別荘が建てられた（註7）。ディクソンが滞在したのを契機に、同27年には亀屋旅館が亀屋ホテルへ改築・改名し、同33年には旧本陣を取り壊して軽井沢ホテルが新築され、外国人を中心とした旅行者を本格的に受け入れ始めた。こうした洋風ホテルの誕生により、別荘や貸別荘に加えて避暑者の滞在先が拡充された。

大正初期には、大手資本（註8）の参入によって、大規模な別荘開発・分譲が始まり、別荘地が旧軽井沢から西や南へ拡大した。日本人の間でも、政界・財界をはじめ文化人など上流階級による大型別荘が建てられ、大正12年（1923）には、日本人避暑客が外国人避暑客を上回った。昭和前期にかけては、ゴルフ場、競馬場などの娯楽施設が新設されて観光開発が進み、外国人宣教師たちが築いた清貧な避暑地から、日本人による華やかな別荘地・観光地へ変貌していった。

戦後は、スポーツとレクリエーション施設が相次いで建設され、平成にかけては、文化施設の充実と高速交通網の整備により、首都圏から身近な文化観光都市として発展した。

註

1. 標高2,568mの軽井沢町北西端、群馬県境にそびえる活火山。天明3年（1783）の大噴火で、ほぼ町全域が火山礫や火山灰に覆われ、大部分の植物が死滅した。
2. 年間100日以上霧が発生する。夏季は碓氷峠による急激な気圧・温度低下、秋季は放射冷却が主な発生要因。
3. 「かるいざわ」は古くは「かるいさわ」と呼ばれていた。地名の由来は諸説あり、水が涸れた沢の意味で「かれさわ（涸沢）」、軽石によってできた沢の意味で「軽石沢」、峠で荷物を馬からおろして背負って登ったことから、古語で背負うを意味する「かるう」から転じた説などがある。
4. 中山道旧道の碓氷峠（旧碓氷峠）は新道の碓氷峠より北へ3kmほどの位置にあった。
5. 現在の旧軽井沢一帯にあり、天保14年（1843）には戸数119戸、本陣1軒と脇本陣4軒、旅籠屋21軒であった。
6. 別荘数は、明治30年（1897）に30戸程度、同39年には113戸まで増えた。
7. 旧海軍大佐であった八田裕二郎により建てられた木造二階建の建物で、現在は町指定文化財となっている。
8. 箱根土地（現プリンスホテル）、鹿島建設、野沢組など。

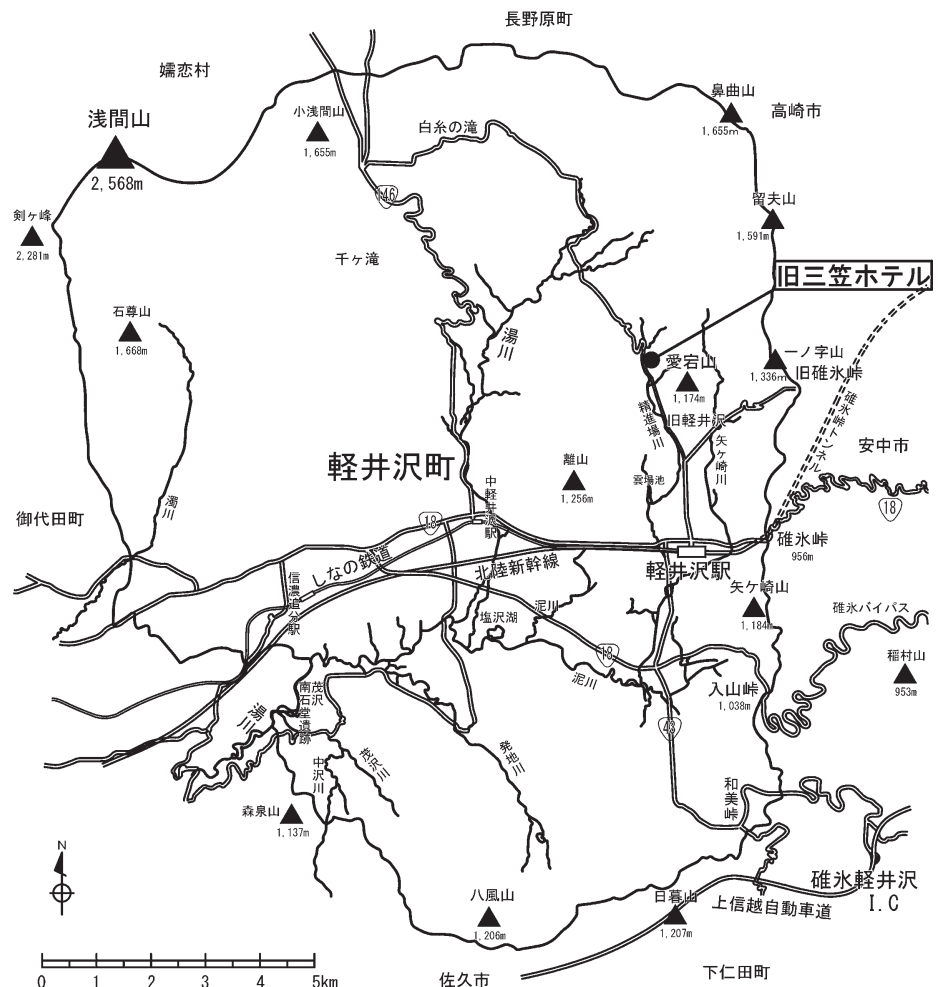


図1-2-1 長野県全図と軽井沢町全図

第3節 旧三笠ホテルの概要

3-1 立地

旧三笠ホテルは、かつて中山道軽井沢宿のあった旧軽井沢より約2km北方の通称三笠^(註1)の地に所在する。愛宕山の北西麓の標高約1,000mに位置し、周囲を山に囲まれた南下りの緩い傾斜地に立地する。昭和35年(1960)までわが国最初の高山鉄道として新軽井沢と草津温泉間を結ぶ草軽電気鉄道^(註2)が付近を通っていた。その軌道跡は舗装され、現在は旧軽井沢ロータリーから続く三笠通りとなり、^{からまつ}落葉松や^{もみ}赤松、^{なみ}樅の大き木が立ち並び、その両側には大正から昭和初期にかけて整備された閑静な別荘地が広がる。この地は景勝地としても知られ、谷間には多くの湧水があり、敷地西側を流れる精進場川の水源になっているほか、軽井沢温泉の泉源もあった^(註3)。

3-2 沿革

三笠ホテルは、明治26年(1893)に実業家山本直良^(註4)の父直成^{なおしげ}が約10万坪の当地を購入したことに始まる^(註5)。広大な草野を譲り受けた直良は、当初酪農経営を試みたが火山灰地の冷涼な気候のためうまくいかず、ホテル経営を中心とした別荘地^(註6)の開発に切り替えた。それまで、定宿としていた万平ホテルの佐藤万平^(註7)に相談して計画を進め、ホテル本館は明治37年(1904)夏頃に着工した。設計は岡田時太郎(1859-1926)^(註8)、棟梁・副棟梁は地元の大工小林代造・孝七兄弟^(註9)で、監督は佐藤万平が務めるなど日本人の手によって建築された。明治38年(1905)3月上棟、秋頃に落成し^(註10)、その翌年の5月には本格的に営業が開始された^(註11)。開業当初、広大な敷地内には、庭園、テニスコート、プール、弓場、牧場、三笠細工所、三笠焼陶磁器製作所^(註12)など様々な施設^(註13)があった。ホテル経営以外に、京都の陶芸家宮川香山^(註14)らを招聘して三笠焼を開窯したほか、ろくろ細工^{あけび}、木通細工など地元の工芸品を製作して、旧軽井沢三笠通りに出店した三笠商店で販売した。

明治39年8月には本館の後方西側に日本館が完成するが^(註15)、同43年8月の豪雨による洪水で流出する^(註16)。大正3年(1914)には別館を営業開始^(註17)するなど、本館竣工後も別棟の新築が行われた^(註18)。しかし、開業以来数年

間は赤字が続き^(註19)、大正14年(1925)に明治屋の磯野長蔵^(註20)が買い取り、株式会社三笠ホテルとなった。

昭和19年(1944)には戦争のため営業を休止、一時外務省軽井沢出張所となる^(註21)。戦後米軍に接收され、同21年2月より米陸軍第一騎兵師団の将兵休養所となる^(註22)。同26年冬には米陸軍第八軍の将校レストホテルとして使用され、翌年3月の接收解除後、名称を三笠ハウスと改めて支配人山名伝兵衛^(註23)が借り受けてホテルの営業を再開した。株式会社三笠ホテルは、昭和41年(1966)6月磯野不動産株式会社へ商号を変更し^(註24)、ホテルは同45年10月に廃業した。同47年2月に株式会社日本長期信用銀行が寮を建設するために土地付きで買い取った^(註25)。取り壊しの動きもあったが、文化学院建築科研究報「軽井沢の近代建築」^(註26)によって紹介されたのを機に、日本建築学会員、軽井沢文化協会、五団体協議会などによって保存運動が起こり、同49年約50m北西へ曳家して移築保存された^(註27)。その際、北側の浴室、北東側の調理場や食堂などの付属棟が撤去され、ロビーの玄関廻りを復原するなどの整備が行われた^(註28)。昭和55年(1980)には軽井沢町の所有となり、重要文化財に指定され^(註29)、同57・59年の修理後は博物館施設として建物の公開を行ってきた。

3-3 明治期の軽井沢のホテル

明治中期以降、軽井沢では避暑地における別荘滞在というライフスタイルが定着していったが、娯楽を備えたホテル滞在という避暑地の新しい過ごし方を提案したのが三笠ホテルだった。当時の書籍や古写真から、広大な敷地にはテニスコート、プールなどがあり、建物内には客室や食堂の他にビリヤード場、酒場、談話室、読書室、遊戯室などの娯楽施設があり^(註30)、最新の設備を備えた一大レジャーホテルであったことが伺える。

明治時代の軽井沢には、建築年順に軽井沢ホテル、万平ホテル、三笠ホテルの3つの洋風ホテルがあった。三笠ホテル以外は現存していないため、詳細は不明だが、明治末における各ホテルの概要は表1-3-1のとおりである^(註31)。いずれも本館は、木造二階建、外壁は下見板張で、三笠ホテルと万平ホテルは同じ大工棟梁によって建築され、正面中央にバルコニー付きの車寄があることが共通している。一方で、三笠ホテルはスティックスタイル^(註32)を基調とした意匠で、屋根が天然スレート葺で煙突が付属するなど、外観からは西洋風の印象をより強く受ける。内部も水洗便所やニードルシャワー^(註33)、温泉を引き込むなど設備が充実しており、駅から離れていたにもかかわらず、宿泊料は1等12円と突出していた^(註34)。



図1-3-1 山本直良
軽井沢高原文庫所蔵

無断使用禁止

表1-3-1 明治末の軽井沢のホテル比較

名 称	三笠ホテル	万平ホテル	軽井沢ホテル
建築年	明治39年	明治35年	明治34年
創業者	山本直良	佐藤万平	佐藤熊六
大 工	小林代造	小林代造	不明
立 地	愛宕山の麓	軽井沢宿桜の沢（移転）	軽井沢宿本陣
駅からの距離	3.3km（30丁）	1.6km（15丁）	1.4km（13丁）
構 造	木造2階建	木造2階建	木造2階建
屋 根	スレート葺	瓦葺	不明
外 壁	下見板張り	下見板張り	下見板張り
棟 数	1棟（M43年日本館流失）	2棟（M38年浅間館増築）	2棟（M38年新館増築）
客 室	30室	50室	60室
定 員	40人	60人	70人
洋 式	仏蘭西式	亜米利加式	亜米利加式
宿泊料	1等12円 2等8円 3等5円	1等8円 2等6円 3等3円	1等7円 2等5円 3等3円
備 考	昭和49年本館移築	昭和11年本館建替え	昭和13年廃業（註35）



図1-3-2 軽井沢ホテル
『ノスタルジック・ホテル物語』より



図1-3-3 万平ホテル（明治35年頃）
万平ホテル所蔵

註

- かつては湯の沢と呼ばれていた。三笠という通称は、山本直良によって名付けられ、由来は諸説ある。眼前の愛宕山が奈良市にある三笠山の姿に似ていること、日露戦争で連合艦隊旗艦を務めた戦艦三笠にあやかっただなどの説がある。
- 大正4年（1915）に新軽井沢～小瀬間まで開業し、同15年に新軽井沢から草津までの全線（55.5km）が開通した。三笠ホテルの南約600mの位置に最寄り駅の三笠駅が所在していた。昭和35年（1960）新軽井沢～上州三原間（37.9km）が廃止、同37年に全線廃止となる。
- 明治38年（1905）10月17日と明治39年8月1日の読売新聞に「三笠ホテル 軽井沢温泉」の広告が掲載されている。「随筆 はんでん木 小さな事実」には、ホテル裏の奥に温泉が湧出し、この温泉を引湯・加熱して供していたとある。
- 明治3年（1870）2月25日生まれ。小浜藩士で岩倉具視の側近だった山本直成の次男。東京帝国大学農学部卒業。千歳海上火災再保険取締役、日本郵船監査、明治製菓役員などの要職を歴任、明治30年丁酉銀行初代頭取就任（『人事興信録』（1903）ほかより）。妻の山本愛子は作家有島武郎の妹で、弟に画家の有島生馬、作家の里見淳がいる。
- 『軽井沢物語』（1991）120頁による。直良は、明治36年（1903）には合わせて25万坪を取得したとされる。
- 別荘としては、明治末に小説家有島武郎の父・武が建てた浄月庵、山本直良が建てた貸別荘が6、7戸あったほか、昭和初頭に数戸建った程度とされる（『軽井沢別荘史』106頁）。
- 佐藤万平（1850～1918）は、万平ホテルの創業者。明治29年（1896）「亀屋ホテル」から「萬平ホテル」へ改名、明治35年現在地に移転し「万平ホテル」に改名。昭和11年にアルプス館（登録有形文化財）が建てられた。
- 安政6年（1859）に唐津藩士の家に生まれる。大阪造幣寮、神戸鉄道局勤務などを経て、明治19年（1886）同郷の辰野金吾と辰野金吾建築事務所を開設する。同21年日本銀行建築のために辰野に伴って洋行し、翌年にかけてロンドン大学に在籍。帰国後、明治28年まで日本銀行建築所の技師として新築工事の監理に従事。同32年独立して東京に岡田工務所を設立し、茨城県牛久市に煉瓦造のシャトーカミヤ醸造場及び事務室などを設計する（『重要文化財シャトーカミヤ旧醸造場施設保存修理工事（災害復旧）報告書』（2016））。日露戦争末期の明治38年6月に満州軍倉庫囑託となって大連に渡り、翌年、大連に岡田工務所を設立し、設計のみならず施工も請け負った。昭和元年（1926）大連にて逝去。
- 東長倉村の出身。小林代造（1858～1917）は軽井沢一の棟梁といわれ、弟の孝七（1873～1943）とショー記念礼拝堂（明治26年）、万平ホテル（明治35年）などを手掛けた。
- 明治38年（1905）10月17日の読売新聞に三笠ホテルの広告が掲載されている（第5章第5節 図5-5-14参照）。
- 宿泊台帳である「REGISTER THE MIKASA HOTEL」には、明治39年（1906）5月29日より宿泊者の記載が始まる（第5章第5節 図5-5-10参照）。
- 三連房登り窯一基、仕上窯一基、素焼窯を備えていたとされ、

- 敷地南東にあった。明治43年（1910）の水害で製造中止となったが、大正10年（1921）に「阿さま焼」に引き継がれ、昭和5年（1930）まで土産物などとして販売された。
13. 『敷嶋美観 下巻』（明治39年発行）に「庭前には最完全なる「テニスコート」あり、花園あり、大池あり、大弓場あり、牧場あり、木通及木根を以て製する三笠細工所あり、浅間砂を以て製する三笠焼と稱する陶磁器製作所あり、之れは彼の眞葛焼を以て有名なる宮川香山翁の監督の下に、注文を受け製作販売す。」とある。
 14. 宮川香山（1842-1916）は、明治時代を代表する陶工で、有島家と親交があった。香山に師事していた井高帰山、森香州らも製作、指導にあたったとされる。
 15. 明治39年8月1日読売新聞に「三笠ホテル 日本館落成」の広告が掲載されている（第5章第5節 図5-5-14参照）。宿泊台帳の部屋名には、明治41年7月より「日本館」の記載がある。
 16. 明治43年（1910）8月14日信濃毎日新聞に「三笠ホテルの巨屋ありしは其東側に溢流し連接せる和洋折衷の一棟を押流し純日本風の数奇を凝らせる一棟の土台下を掘り流したれば是も間もなく倒壊し悠忽の間に数万圓の価値ある風雅の建築物二棟を烏有に帰せしめたる」とある。また、洪水によって三笠ホテルへの接道が敷地東側から西側の精進場川沿いへ変わった。
 17. 別館は、敷地後方東側の丘の上に建てられた。大正末頃の間図面には、1、2階平面図が描かれており、客室は12室ある（第5章第5節 図5-5-49参照）。建築年代は不詳だが、宿泊台帳の部屋名には、大正3年7月より「Annex」の記載がありこの頃開業したと考えられる。なお、昭和26年（1951）秋米軍の失火により焼失した。
 18. 日本館と別館、三笠焼陶磁器製作所、ボイラー室などの付属棟は元鉄道大工であった後藤浅吉とその息子兄弟後藤仙八・良造が営む後藤工務所による建築。後藤工務所は、敷地内の山本直良の別荘のほか、新渡戸稲造の山荘（ともに現存せず）を手掛けたとされる。
 19. 大正4年（1915）から同12年までは松田氏が支配人となって経営を一任され、黒字に転換したとされる。大正4年発行の『HOTELS IN JAPAN』には「S.Matsuda.Manager」とある。
 20. 「軽井沢の近代建築」11頁による。ただし、大正13年（1924）7月2日の読売新聞の広告には、三笠ホテルの宿泊申込先が中央亭となっているため（第5章第5節 図5-5-14参照）、この頃すでに経営が変わっていたとみられる。明治屋は明治18年（1885）に横浜で創業し、現在は東京都中央区京橋に本社を置く小売業者。三笠ホテルの事実上の経営は明治屋の子会社である中央亭（明治40年創業の宮内庁御用達レストラン）が行った。磯野長蔵（1874-1967、旧姓三島）は、鳥取県倉吉市出身で、明治31年磯野商会（現明治屋）に入社し、同35年に磯野計の長女・菊と結婚、大正8年（1919）明治屋三代目社長に就任。
 21. 外務省出張所として、5名の職員とその家族が駐在した（『ハンガリー公使大久保利隆が見た三国同盟』230頁）。昭和20年（1945）5月にはロシア人などの疎開場所にも充てられた（『心の糧（戦時下の軽井沢）』110頁）。
 22. 接収開始年月は『続日本ホテル略史』（昭和24年）による。
 23. 米軍接収時に万平ホテルのチーフで、明治屋より建物を借り受けて営業した。山名は家族ぐるみで経営に当たった。
 24. 昭和41年（1966）10月の磯野不動産㈱取締役社長磯野謙蔵から軽井沢町長へ宛てた書面による。
 25. 家屋調査書によると昭和47年（1972）2月15日に磯野不動産（株）から（株）日本長期信用銀行へ売買された。当初の計画は、東翼玄関とロビーを残して大部分は解体される予定であった（昭和47年10月10日信濃毎日新聞）。
 26. 文化学院建築科の学生の実習として、昭和45～46年にかけて行った3回（3日間程度／回）の現地調査や関係者への聞き取りを元にまとめた46頁の報告書。
 27. 昭和48年（1973）の「長銀軽井沢三笠ハウス移築工事」の工事図面より、建物の向きを反時計回りに若干変えながら約50m北西へ曳家したことが分かる。
 28. 移築工事において、ロビーの南面中央間の玄関出入口を当初の窓に復元し、後設の車寄せを撤去した。また、ライブラリーの北側に張り出したサンルームを撤去して外壁と出入口を整備し、浴室や食堂、料理場など付属棟の撤去に伴い、付属棟が接続していた周囲の外壁や出入口を整備し、新たに庇や石階段を設置した。
 29. 指定時は現在より敷地が小さく、軽井沢町が平成11年（1999）と平成14年（2002）の二度に渡り、建物南側及び東側の用地を取得して現在の敷地規模となる。
 30. 『敷嶋美観 下』（明治39年発行）に「西洋館には客室、寝室、食堂、酒場、應接間、談話室、読書室、喫煙場、玉突場、遊戯場、寫眞暗室等あり。」とある。
 31. 大正元年（1912）8月発行『かるゐざわ』を元に、古写真から判明したことを加筆・編集した。
 32. 19世紀後半のアメリカの建築洋式で、柱や梁などの骨組みを化粧材として強調したデザインが特徴。
 33. 明治38年（1905）10月17日読売新聞の三笠ホテルの広告には、「軽井沢温泉（ニードル及シャワーノ設備あり）」とある（第5章第5節 図5-5-14参照）。
 34. 当時、軽井沢にあったつるや旅館の宿泊料は、1日3食付き1等2円であった（『かるゐざわ』（大正元年）より）。
 35. 昭和18年（1943）には本陣時代からあった門と庭園を残して除却された。同54年（1979）頃から分譲されて商店街の一部となった。

第4節 建造物の概要

4-1 重要文化財の指定（官報告示）

○官報告示 文部科学省告示第114号

文化財保護法（昭和25年法律第214号）第27条第1項の規定により、次の表に掲げる有形文化財を重要文化財に指定する。

昭和55年5月31日

名称	員数	構造及び形式	所有者	所有者住所	所在地
旧三笠ホテル	1棟	木造、建築面積513.62平方メートル、2階建、玄関ポーチ及び屋根八角塔屋付、スレート葺	軽井沢町	長野県北佐久郡 軽井沢町大字長倉2,381番地1	（長野県北佐久郡軽井沢町大字軽井沢字唐堀1,339番2及び1,339番272）

※所在地は平成16年7月26日合筆され、1,339番342に変更された

4-2 指定説明

旧軽井沢から約1キロメートル北へ入った通称三笠の地は、日露戦争の頃、実業家山本直良が開発したところである。三笠ホテルは明治37年に建設が計画され、翌年3月上棟、39年5月には営業が開始された。設計は岡田時太郎、棟梁は土地の大工小林代造で、万平ホテルの佐藤万平が監督している（註1）。建築後、日本館・別館・浴室棟・食堂棟が増築され、本館もロビー等が改造された。大正14年12月、明治屋の手に移って株式会社三笠ホテルとなり、昭和19年には戦争のため営業を休止、戦後米軍に接収され、27年接収解除後、三笠ハウスとして営業を再開したが、45年10月に廃業している。47年2月には株式会社日本長期信用銀行の所有となり、翌年約50メートル北へ曳家し、その際、後設の浴室棟・食堂棟を撤去、ロビー・玄関回りを一部復原する整備を行った。

木造二階建、建築面積513.62平方メートル、平面は凹型で、南面し、正面中央に玄関部分、西面北端には多角形の便所部分が張出す。屋根は寄棟造で、正面中央張出し部と左右翼中央、背面中央に飾り破風を設け、西面張出し部には八角形の塔屋をのせている。もとは天然スレート葺であったが、曳家後、カラーベストコロニアル葺に変更された。基礎には花崗岩を積み、外壁は下見板張りで、階境に浅い庇を設け、軒は持送りを付けて鼻隠板を打つ。窓は四枚引違い又は上げ下げのガラス窓として一階にはアーチ形の欄間を付け、出入口は正面玄関が引分け戸のほかは開戸とする。

内部は、玄関の奥に主階段をおき、中央棟は南側に廊下をとって、一階にロビー・食堂・客室等を配し、二階はすべて客室とする。床は縁甲板にリノリウムを張り、壁は漆喰塗で、天井は格天井を張るが、格縁は面皮付の雑木が多い（註2）。食堂だけは特別に内装を凝らしており、

柱や梁はモルディングされ、窓にはカーテンボックスが付けられている。小屋組は中央棟と西翼がキングポスト、東翼がクイーンポストである。

この建物は純洋風のホテルとして建築されたもので、多角形の張出しや塔屋を設けて左右対称を破り、付土台・定規柱・額縁等を強調した壁面・持送りを付けた軒など優れた外観をもつ。内部はロビーの雑作に見るべきものがあり、暖炉・照明器具・衛生陶器等も古いものが残っている（註3）。この種の建築にありがちな後世の改造が僅かで、ほとんど当初のままであるのも珍しい。

註

1. 中央部の小屋組に次の〔棟札〕がある。

明治三十八年	技師	棟梁
上棟祭	山本直良	岡田時太郎
三月二十七日	監督	副棟梁
	佐藤万平	小林孝七

施主の山本直良は明治3年生まれ、日本郵船・第十五銀行・明治製菓の重役を務めた実業家で、夫人は作家有島武郎の妹である。設計者の岡田時太郎は安政6年生まれ、鉄道局技生・文部省雇等を経て辰野金吾に師事し、日本銀行本店の工事現場主任を担当した。明治32年岡田工務所を開き、38年には満州に渡って活躍した。昭和元年没。

2. 上棟後に岡田時太郎が満州へ去ったため、施主の山本直良が直接指導に当たったといわれ、施主の好みで雑作が変えられた部分もあると伝えられている。

3. 照明器具や便器等は英国製である。なお、照明は当初アセチレンガスをを用いていた。

4-3 規模・主要寸法（竣工）

区 分	摘 要	位 置	寸法・面積
桁 行	桁行両端 柱間真々	中央棟	42.299m
		両翼部	9.090m
		中央車寄	4.545m
		東翼車寄	4.545m
梁 間	梁間両端 柱間真々	中央棟	7.272m
		両翼部	10.908m
		中央車寄	3.636m
		東翼車寄	3.636m
軒 出	側柱真より 広小舞外下 角まで	本 屋	0.679m
		塔 屋	0.606m
軒 高	布石上端より 広小舞外下 角まで	本 屋	7.533m
		塔 屋	12.378m
棟 高	布石上端より 棟頂まで	中央棟	10.817m
		両翼部	12.090m
建築高さ	ベタ基礎より フィニアル 頂部まで	塔 屋	15.500m
平 面 積	側柱真内側	1 階	506.46㎡
		2 階	506.46㎡
		中央車寄	15.79㎡
		東翼車寄	16.53㎡
		合 計	1045.24㎡
軒 面 積	広小舞外下 角内側	全 体 (車寄含)	640.50㎡
屋根面積	平葺面積	本 屋	735.83㎡
		塔 屋	10.34㎡
		中央車寄	19.93㎡
		東翼車寄	30.78㎡
		北中央庇	2.05㎡
		北西寄庇	2.29㎡
		合 計	801.22㎡

4-4 構造形式（竣工）

概 要

木造、二階建、寄棟造スレート葺、中央棟桁行23.3間、中央棟梁間4間、両翼部桁行5間、両翼部梁間6間、南面。正面二か所車寄付、鉄板葺。

平 面

建物は敷地北西寄りに南面して建つ。本屋は東西両翼を正面に突出させた凹型の左右対称の平面を基本とするが、西面に半八角形の便所を突出させて左右を違える。

中央棟の南に廊下をとって北に客室を並べ、両翼は中廊下の東西に客室を並べる形を基本とする。

1階は南面中央及び東翼に車寄を付し、中央玄関の奥に踊場付き両返しの主階段を置き、東翼玄関の奥をロビーとする。中央棟の東西にそれぞれ直階段を置く。東半にロビーやライブラリー、リビングルームなどの共有空間を配し、1階の西半及び2階はすべて客室とする。西面の突出部は1、2階とも便所とする。

基 礎

割栗石地業、鉄筋コンクリートベタ基礎の上、側廻りは安山岩布石三段積み、要所に換気口を設ける。換気口には正面は透彫鋳鉄製グリル、背面及び両側面は堅格子鉄製グリルを嵌め込む。土台及び床束下部はコンクリート製独立基礎とする。暖炉及び浴室基礎は無筋コンクリートとする。外周は、雨落排水溝を廻らし、雨落葛石据内側洗い出し仕上げとする。東・北側の各出入口には火成岩野面積の石階3級を設ける。

車寄は鉄筋コンクリートベタ基礎の上、モルタル塗。独立基礎は鉄筋コンクリートに凝灰岩切石貼り。中央玄関石階4級、東翼玄関木階4級。

軸 部

外周は布基礎上に土台を据え、約1間間隔でアンカーボルトを入れて基礎と繋ぐ。内部間仕切は独立基礎上に土台を据える。隅の通し柱、管柱、間柱を土台に柄差しにして建てる。胴差、2階梁、小屋梁、桁、筋違で固め、開口部には窓台、窓楣を組む。通し柱と胴差、桁等を短冊金物と逆目釘で固定する。

車寄は独立柱を三本一体で建て、軒桁、軒梁を受ける。

床 組

1階は、コンクリート製束石ブロックの上に床束を立て、側面に根掘みを釘留めし、大引を載せる。大引は土台に柄差、根太を大引に釘止めし、床板を張る。2階は、梁組上に根太を並べ、床板を張る。

小屋組・野地

中央棟をキングポストトラス（真束）組、両翼部をクイーンポストトラス（対束）組とし、陸梁、真束、対束、方杖、合掌、母屋、転止め、棟木、振れ止めからなる。トラスの要所をボルト、ナット、座金の他、帯金物、箱金物、羽子板ボルトなどの金物で緊結する。陸梁は二丁継とし、継手位置で上・下又は両側面に添木を施し、ボルト締めとする。母屋は、鼻母屋から棟木を中央棟で4等分、両翼部で6等分し、野垂木を受けて野地板を張る。

八角塔屋は、小屋梁上に真束を立て、合掌を放射状に架ける。母屋を取付け、小幅の野地板を流し張りに縦に二枚張る。

屋 根

寄棟造、天然スレート一文字葺、大棟・隅棟は木下地鉄板包みとする。棟は樋棟、樋棟受け、障泥板を鉄板で包み、スレートを額葺にする。下地防水は野地板上に改質アスファルトルーフィング敷き。暖炉位置の屋根に煉瓦積の煙突を配し、モルタル仕上げとする。煙突裏側雪割りは鉄板葺。正面中央と両翼中央、背面中央に飾り破風を設け、各棟端にはフィニアルを据える。

八角塔屋は、鉄板葺で上部を急勾配、下部を緩勾配の鍍屋根とし、頂部にフィニアルを据え、隅棟を木下地の鉄板包みとする。

東翼車寄は切妻造、瓦棒鉄板葺。中央車寄は寄棟造、鉄板葺で周囲三方に内樋を廻す。北面庇は片流れ及び切妻造、瓦棒鉄板葺。

軒廻り

漆喰仕上げの小壁を廻らし、付柱から持送りと腕木を出して出桁を受け、疎垂木を配し、軒裏を化粧野地とする。先端に鼻隠板、破風板を廻らし、その外面に繰型付廻縁を打ち付け、軒樋を設ける。陸梁尻には繰型を施す。

八角塔屋は小壁板を張り、切目状に軒天井として、廻縁、鼻隠板を廻す。

外 装

外壁は、軸部や胴蛇腹、窓額縁など木構造を強調したスティックスタイルを基調とし、壁板は下見板張りで、軒は装飾を施した持送りで支持する。化粧木部として、付柱、付土台、腰長押を取付け、階境に胴蛇腹を廻す。胴蛇腹裏板の要所に換気口を設けて、金網を張る。1階には楕形アーチと半円アーチの欄間を付ける。

八角塔屋は各面にガラリー窓を設け、下部を簾子下見板張りとする。

車寄は開放とし、中央車寄のバルコニーに手摺を廻す。

内 装

床は1階全面と2階廊下を二重の板張とする。下張りと2階客室の床板は本実の脳天釘打ちで根太に留め、上張りは小幅縁甲板の落し釘留めとする。廊下と階段はリノリウム筋敷、2階客室はリノリウム全面敷、1階ロビーとライブラリーは、リノリウム中央敷とする。便所及び客室№18前室の浴室はタイル張り、客室№23浴室はモルタル仕上げとする。

内壁は、木摺下地の大壁漆喰塗で、幅木と腰見切縁を巡らし、扉・窓の周囲に額縁を廻す。腰壁及びロビーの壁を玉子漆喰、ライブラリーの壁を鼠漆喰とする他は、白漆喰とする。天井は、木組板張天井だが、2階の西翼周辺の客室を成形材による木組天井とする他は、棧に皮付きの雑木半割丸太を用いる。

ロビーは特別に内装を凝らし、独立柱や天井の化粧梁にはモールディングを施し、腰壁には皮付き雑木半割丸太の堅子を取付ける。窓には松と鶴の彫刻・三笠ホテルのマークをあしらったカーテンボックスを取付け、レースカーテンを釣る。その他、東西翼の各室と客室№23、廊下南面、主階段北面にはドレープやレースカーテンをカーテンロッドから釣り下げる。

建 具

窓は、引違いガラス窓若しくは上げ下げガラス窓として襻状に棧を付す。1階の引違い窓上には楕形アーチの欄間を付け、嵌殺し及び回転ガラス窓を入れ、上げ下げ窓上には半円形の欄間を付け、嵌殺し窓を入れる。附室のない2階客室№7と12の北面は、引違いガラスの二重窓とする。外部の扉は、正面玄関を引分けの腰付ガラス戸とし、他は片開き若しくは両開きの腰付ガラス戸、両開きの板戸とする。

内部の扉は、ロビー・リビングルームと廊下境は両開きの板戸とし、中央廊下と便所前廊下境は両開きの腰付ガラス戸、その他の各室と廊下境は片開きの板戸とする。客室と附室境には、南側では片開きの腰付ガラス戸、北側では引分け腰付ガラス戸を吊る。

塗 装

外部木部は、油性調合ペイント塗、ただし、下見板と軒裏、塔屋のガラリはオイルステイン塗とする。外部水切板金を合成樹脂調合ペイント塗、漆喰・モルタル面を合成樹脂エマルジョンペイント塗とする。内部木部は、階段手摺、ロビー柱型、マントルピース、カーテンロッド・ブラケット・リングをワニス塗とし、床板をオイルステイン塗、その他を油性調合ペイント塗とする。

設備・造作

各室に電気を配線し、天井中央にチェーンペンダントを吊り、客室附室と廊下にはパイプペンダントを下げる。ロビーには天井中央に6灯式のシャンデリアを、その周囲に3灯式のシャンデリア4基を吊る。便所・浴室にはコードペンダントを吊る。

暖炉をロビーに2箇所、ライブラリー、客室のうち東西両翼12室と2階北面中央東寄り2室に各1箇所設ける。

1、2階便所に手洗器、洋式大便器、ハイタンク、小便器を備え、1階便所前廊下、全ての客室には手洗器と鏡、鏡下台を備える。このほか、客室№18と23の広い客室2室には洋式大便器とバスタブ付の浴室を付す。

その他

連携事業において、建物の活用上管理部門となるリビングルーム、客室№5、6には、使い勝手や古材保護などを考慮して、間仕切壁を設置し、一部を二重床とした。

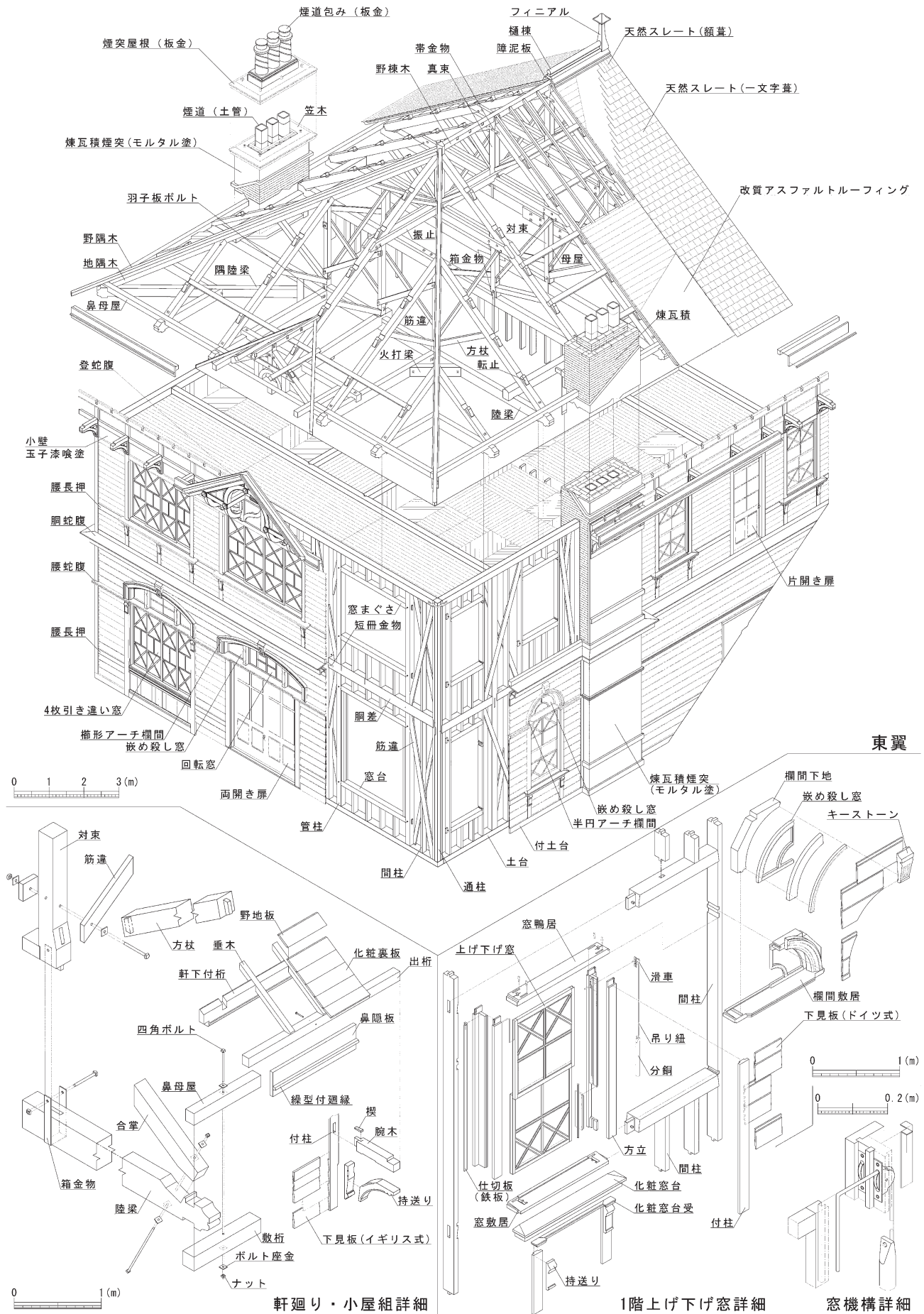


図1-4-1 東翼模式図(アイソメ図)

室内細部形式

室 名	床	内 壁	天 井	演窓装置	照明器具	その他の装置
中央車寄	モルタル塗	—	木組板張り天井	—	なし	屋上手摺付きバルコニー
東翼車寄			板張り天井		シーリングライト	木階4級
ロビー（旧ダイニングルーム）	板張り、中央リノリウム敷き	玉子漆喰塗 腰壁皮付き半割丸太堅子、幅木・腰見切・額縁	折上げ板張り天井	レースカーテン、カーテンボックス	シャンデリア 6灯×1基、 シャンデリア 3灯×4基	独立柱、暖炉、マントルピース
ライブラリー		鼠漆喰塗、幅木・腰見切・額縁	丸太木組板張り天井	なし	チェーンペンダント×2台	暖炉、マントルピース
リビングルーム	板張り	白漆喰塗、腰壁玉子漆喰塗、幅木・腰見切・額縁 ※客室No.2・3・15・16附室の廊下境の壁上部は縦板張り	丸太木組板張り天井		チェーンペンダント	なし
エントランスホール	板張り、中央リノリウム筋敷き				シャンデリア	石階4級、木製手摺（親柱、手摺子）
主階段	板張り、中央雷文ボーダー柄リノリウム筋敷き		レースカーテン、カーテンロッド（踊場）	チェーンペンダント	木製手摺（親柱、手摺子）	
東・西副階段			丸太棹縁板張り天井	なし	なし	鉄製手摺（ブラケット）
2階ホール	板張り、中央リノリウム筋敷き		丸太木組板張り天井	丸太棹縁板張り天井	ドレープカーテン、カーテンロッド	シャンデリア
1、2階廊下		パイプペンダント				
客室No.1・4・14・17	リノリウム敷き	丸太木組板張り天井（客室No.11、14～17は木組板張り天井）	なし	チェーンペンダント	暖炉、マントルピース、手洗器、鏡	
客室No.2・3・15・16					暖炉、マントルピース	
客室No.5					なし	
客室No.6・8～11					客室No.8は暖炉、マントルピース	
客室No.7・12					手洗器、鏡、客室No.7は暖炉、マントルピース	
客室No.2・3・15・16附室			ドレープカーテン、カーテンロッド	パイプペンダント	手洗器、鏡	
客室No.5・6・8～11附室			なし	なし		

室名	床	内 壁	天 井	演窓装置	照明器具	その他の装置
客室No18	板張り、中央絨毯敷き (整備)	白漆喰塗、腰壁玉子漆喰塗、幅木・腰見切・額縁	丸太木組板張り天井	ドレープカーテン、レースカーテン、カーテンロッド	チェーンペンダント	暖炉、マントルピース
客室No18前室				ドレープカーテン、カーテンロッド	チェーンペンダント、ブラケット	暖炉、マントルピース、手洗器、鏡
客室No18浴室	タイル張り	白漆喰塗、腰壁タイル張り		なし	コードペンダント	バスタブ、大便器、貯水タンク
客室No18附室	板張り、中央リノリウム筋敷き	白漆喰塗、腰壁玉子漆喰塗、幅木・腰見切・額縁 ※客室No18・19附室の廊下境の壁上部は 縦板張り	丸太棹縁板張り天井	ドレープカーテン、カーテンロッド	パイプペンダント	手洗器、鏡
客室No19	板張り		丸太木組板張り天井	ドレープカーテン、レースカーテン、カーテンロッド	チェーンペンダント	暖炉、マントルピース
客室No19附室			丸太棹縁板張り天井	ドレープカーテン、カーテンロッド	パイプペンダント、ブラケット	手洗器、鏡
客室No20			丸太木組板張り天井		チェーンペンダント	暖炉、マントルピース、手洗器、鏡
客室No21・22				なし		なし
客室No21・22附室			丸太棹縁板張り天井		なし	手洗器、鏡
客室No23			丸太木組板張り天井	ドレープカーテン、カーテンロッド	チェーンペンダント×2台、ブラケット	
客室No23浴室	モルタル塗り	白漆喰塗、腰壁モルタル塗り	丸太棹縁板張り天井	なし	コードペンダント	バスタブ、大便器
1、2階便所	タイル張り	白漆喰塗、腰壁タイル張り	丸太木組板張り天井			手洗器、大便器、小便器、貯水タンク

※室内の塗装仕上げは以下のとおり

- ・額縁、幅木、腰見切り、天井板、建具は油性調合ペイント塗仕上げ、床板（見え掛かり）はオイルステイン塗。
- ・マントルピース、カーテンボックス、カーテンロッド、独立柱（ロビー）、主階段手摺はワニス塗仕上げ。

※連携事業（活用環境強化事業、防災施設等整備事業）で以下の設備を設置

- ・各室にコンセント設備、自動火災報知設備（煙感知器）を設置。
- ・ライブラリー、客室No.7～11・19・20・23には、ライティングダクトレールを吊って、スポットライトなど補助照明を設置。
- ・リビングルームには、スタッフ控室として空調・給排水設備、ライブラリーには、ミュージアムショップとして暖房設備。
- ・客室No.1～4（附室を含む）には、カフェとして暖房設備・換気設備、客室No.5・6（附室を含む）には、簡易厨房として空調・給排水・換気設備、客室No.14～17には、貸室として換気設備を設置。
- ・小屋内に点検用のキャットウォークを合板足場板で設置し、照明設備を設置（天井改め口を2階ホールと客室No.1・12に設けた）。
- ・客室No.20には、展示室としてピクチャーレールを設置。